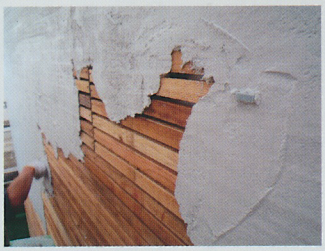
# 関東都市部での土の活用に取組む

版築を生かした玄関まわり。

版築ヒーターの数値計測中。



木摺りに漆喰の施工中。

## 木摺りを使うことのメリット

㈱ワイズの山本康彦さんは左官の仕事から建築の世界に入り、現在は関東の都市部で土の使い方を広めたいという思いから、さまざまな活動を続けている。

もともと手がけるすべての住宅の外壁には、木摺りに瀬戸漆喰を使っていた。砂漆喰外壁の家を推進する中で、思いはやはり室内に土を使うことへと向いていった。いま取り組んでいるのは内壁に木摺りと土壁を使おうというもの。従来は石膏ボードに和紙貼り、のり土仕上げにしていたところ、竹小舞をつくることができる職人は少なくなったけれど木摺りならできると考えた。さらに木材の利用促進にもつながる。いままでチップになっていたような端材を使用することができるのだ。荒壁は塗らず、中塗りは切り返し仕上げ。土壁の厚さは15～20㎜である。

ただ、木摺りの土壁といっても全室となると費用や工期の問題が大きくなる。そこで一室だけでも土壁の部屋にするよう提案をしている。それには数万円余計に負担してもらう程度で済む。さらに真壁ではなく大壁でも土壁は使えることを、これまでの建築した住宅で示してきた。

また、LDK形式の家が多くなっているということでお勧めなのが「版築ヒーター」。キッチンの腰壁部分にヒーターをまわして、石灰を入れてやや薄く塗れるようにして版築をつくる。そこに蓄熱されるわけで、既存の給湯器からの熱をまわして使用することもできる。

本格的な土の使い方ではないかもしれないが、土になじみの薄い関東では、まず土を知ってもらうところから進めていきたいという。実は一般の人には「新建材やベニヤは嫌だ」という人は多い。土と相性の良い木摺りを使っていくことは、そんな面からも意味がある。

## 自然由来の材料

土は自然由来の素材である。しかし珪藻土は性能の差が大きく、実験の結果、吸湿性能のないものもあった。世の中に「自然素材」が多数出回っているけれど、その中には問題があるものも多くあると山本さんは指摘する。住宅にとって重要なのは

# 湘南村のワークショップ

## かまどをつくる

できあがった漆喰かまどでご飯を炊いて食べる

かまどづくりのワークショップのようす。かまどづくりは、首都圏の左官職人の方々も普段は目にすることも手に取ることも少ない技法を身につけていただく場。一般の方も職人の持つ技術を目の当たりにすることで、その緻密さや腕を見ることができる。

漆喰を塗ってかまどを仕上げていく。

鏝を使うというのも現代ではあまりできない体験になった。

断熱性をただ高めるということではなく、家中にたまった湿気を排出すること。土壁はその役割を果たしてくれる。

一方、かまどの製造・販売もおこなっている。それは土の技術の伝承につながると考えているからだ。かまどづくりは左官が荒天で仕事がないときの仕事だった。かまどでご飯を炊いていると輻射熱で室内も暖かかったのではないだろうか。ワークショップで一般の方に参加していただき、かまどづくりを行ったことがあった。そんなところから、「左官はおいしい」「土はおいしい」ということを実感してもらえれば、と考えている。

## 口コミで広がる湘南村の活動

湘南の地で、一般の人に土や木の良さをわかってもらうために「湘南村」というワークショップの開催を続けている。次第に口コミで多くの人が集まるようになってきた。開催の内容としては、前述のかまどづくりや土塗り、泥団子づくりなど。

職人や左官は、宣伝の方法は苦手な人が多く、お客さんとの接し方が

# 湘南村のワークショップ

土を塗る体験は子供たちにとっても貴重なもの。

「ちびっ子職人」が木摺りへの土塗りを体験。

## 土を塗る

泥団子のタネづくり。

## 泥団子をつくる

泥団子づくりのワークショップ

〈取材協力〉㈱ワイズ　神奈川県茅ケ崎市浜竹 3-4-64　TEL 0467-88-3903

わからない。湘南村は、建築側としてもお客さんと接する訓練の場にもなっている。山本さんは職人さんたちの代弁者として取り組みたいと語る。

公園には砂場がなくなって、一般の人たちが土に接する機会は確実に減っている。かつては土が生活に密着していたが、いまはそうではない。ワークショップを通じて土に親近感をもってほしいという。

これからはいろいろな垣根を取り払って、地元の土を使えるようにしていきたいのだという。いまは愛知の土を使っているけれど、この湘南の地でも地元の土を使っていた歴史がある。かつては泥コン屋もあった。重機屋さん・解体屋さんと組んで、土について情報を集積し泥コン屋をつくることを目指している。

さらに地元の土を使う夢は膨らんでいる。国道134号際の鎌倉断層。崖から崩れた土が、多大な費用をかけて処分されている。このごみと同然の土を活用できないか。石灰などをいれないと使えないだろうが、この「鎌倉の土」を使って版築の土留めをつくれば鎌倉の町の振興にもつながるのではないかという。